

富山県 砺波市

増山裏亀山遺跡発掘調査報告

EXCAVATION REPORT

OF

THE MASUYAMA-URAKAMEYAMA SITE

2004年8月

砺波市教育委員会

序

砺波市は、富山県西部の砺波平野のほぼ中央部、大部分が庄川により形成された扇状地上に位置しています。砺波市は、将来の都市像を「散居に広がる 快適都市 となみ」とし、まちづくりの基本理念を「人すこやか 心なごやか 緑さわやか」と定め、文化遺産である散村の保護・活用を図るとともに自然との調和をもとめ、住民が安心して暮らせる住みよい都市をめざしています。

さて、砺波市には、魚津市の松倉城、高岡市の守山城とならび越中三大山城のひとつに数えられる増山城跡が存在しています。昭和40年に県の史跡に指定され、また増山城跡県定公園として市民の憩いの場となっています。

増山裏亀山遺跡は、増山城跡の北西に隣接しており、平成14年度に試掘調査を行った結果、中世と考えられる遺構が発見された遺跡です。増山遺跡と並び、増山城跡の城下の一部を形成する可能性がある遺跡として注目されます。

このたび林業地域総合整備事業として、地元住民の悲願であった林道増山城跡線の改良工事を実施する運びとなりました。出来る限り埋蔵文化財の保護に努めてまいりましたが、一部記録保存を必要とし、増山裏亀山遺跡の本発掘調査を実施することになりました

発掘調査の結果、増山城跡の歴史を解明する上での貴重な資料が得られました。その成果をまとめた本書が地域の歴史や文化の研究にご活用いただければ幸いです。

おわりに、調査の実施及び報告書刊行にあたり、地元増山地区自治振興会・富山県埋蔵文化財センターをはじめ関係各位に多人なるご援助・ご協力をいただきました。衷心より感謝申し上げます。

平成16年8月

砺波市教育委員会

教育長 堀田 良男

例 言

1. 本書は平成15年度に行った富山県砺波市増山に所在する増山裏龜山遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、砺波市増山地内における林道増山城跡線の拡幅工事に先立ち、砺波市教育委員会が実施した。
3. 調査事務局は砺波市教育委員会内に置き、事務は学芸員野原大輔が担当し、教育次長喜田春明が統括した。
4. 調査に関するすべての資料は砺波市教育委員会で保管している。なお、遺跡の略記号は市名と遺跡名の頭文字 TMUK (Tonami Misayama UraKameyama)とした。
5. 調査事務局及び調査担当者は以下のとおりである。

調査事務局	砺波市教育委員会	教育次長	喜田 春明
生誕學習課	課 長	老松 邦雄	
同	係 長	喜田 真二	
試掘調査担当者	同	学芸員	野原 大輔
本調査担当者	同	学芸員	野原 大輔

6. 調査期間及び面積は以下のとおりである。

試掘調査	平成14年10月24日～10月25日（実動2日）	調査対象面積910m ²
本発掘調査	平成15年 8月 1日～ 8月29日（実働13日）	調査面積153m ²

7. 本書の執筆・編集及び図版作成は、野原が行った。

8. 本書で使用している遺構の略記号は以下のとおりである。

土坑-SK、溝-SD、ピット(小穴)-SP

また、本書で使用している方位は真北で、標高は海拔高である。

9. 土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準上色帖』(2001年前期版)に準拠している。地形分類の範例及び名称は『土地分類基本調査』(経済企画庁:1970)・『10万分の1富山県地質図説明書』(富山県:1992)を参考にしている。
10. 出上した炭化物の年代測定および樹種同定は、株式会社中部日本鉱業研究所(富山県高岡市西藤平蔵)に業務委託した(第3章第5節)。
11. 調査期間や整埋作業期間を通じて、宮田 進一氏(財團法人富山県文化振興財团 墓藏文化財調査事務所)より多大なるご教示、ご協力を得た。記して衷心より謝意を表す。
12. 発掘調査・整理作業参加者は次のとおりである。

発掘調査 野原礼子(生涯學習課)

荒木久平、天野秋一、水森 是、高田一郎、西村昌哉、畠田正明、安ヶ川礼子

(以上、社団法人砺波市シルバー人材センター)

整理作業 横川美雪(生涯學習課)

根川勝子、前田紋子(以上、社団法人砺波市シルバー人材センター)

目 次

序 文 例 言 目 次 序 章

第 1 節	調査に至る経緯	1
第 2 節	試掘調査の結果	2
第 2 章 位置と環境		
第 1 節	地理的環境	3
第 2 節	歴史的環境	4
第 3 章 調査の成果		
第 1 節	調査方法と調査経過	7
第 2 節	基本層序	7
第 3 節	遺 構	10
第 4 節	遺 物	14
第 5 節	自然科学分析	15
第 4 章 ま と め		19

【参考文献】

【図版目次】

- 第 1 図 増山裏亀山遺跡と周辺遺跡
- 第 2 図 基本層序模式図
- 第 3 図 発掘調査区位置図(1)
- 第 4 図 発掘調査区位置図(2)
- 第 5 図 調査区全体図・遺構断面図
- 第 6 図 遺構図
- 第 7 図 出土遺物実測図

【表目次】

- 表 1 増山裏亀山遺跡と周辺遺跡一覧表
- 表 2 出土遺物観察表

【写真図版目次】

- 図版 1 空中写真
- 図版 2 遺構(1)
- 図版 3 遺構(2)
- 図版 4 出土遺物

序 章

第1節 調査に至る経緯

平成10年度、砺波市は林業地域総合整備事業の一環として林道増山城跡線（以下、林道と称す）の整備計画を策定した。林業地域総合整備事業は、森林法のなかの森林林業基本法に基づいた事業であり、砺波市農林課では林野庁・富山県治山課と協議のうえで平成13年度から事業を進めている。今回の道路改良では昭和20年代に敷設したこの林道を幅員4mに拡幅する計画である。総延長1,000mの総舗装で、総事業面積は4,000m²にのぼる。総施工期間は、平成13年度から平成15年度となる。

林道は、県指定史跡であり周知の埋蔵文化財包蔵地である増山城跡の範囲内に位置することもあり、事業計画策定当初から可能な限り埋蔵文化財の現状保存を図る方針で協議が進められてきた。

平成11年度、市教育委員会は市農林課から事業照会を受け、事業予定地内における埋蔵文化財の有無についての確認を行っている。協議のなかで現地を訪れた際、亀山城付近の切り通しの壁面に炭化物の集積を発見、それらを試掘調査計画に含めることを確認している。

平成11年6月と平成12年6月の2回にわけて砺波市文化財保護審議会（新藤正夫会長）は、工事範囲周辺の現地視察を行った。このとき、西井龍儀委員から、炭化物集積は炭焼きの痕跡の可能性が高いことと、通称「小判清水」付近に林道を挟んで地形的に平坦な部分があり増山城跡との関連があるのではないかという指摘があった。その地形が山城を構成する郭の可能性があることから試掘調査の対象範囲に含めることになった。

平成12・13年度にかけて市教育委員会は、小判清水周辺の試掘調査を実施した。平成12年度の試掘調査では、遺構・遺物は検出されなかった。その後、平成13年度に追加の試掘調査を実施した。結果、明確な遺構は確認されなかったが、トレーナ断面に平坦に堆積する層位が存在することが判明、人為的に構造物を造りだしている可能性がでてきた。加えて耕土中から16世紀後半頃の中世土師器皿片を検出したことから、記録保存等の保護措置が必要であることを確認し、本発掘調査を実施することとなった。平成14年度施工面積は、2096m²であり、総延長は524mであった。平成14年5月から6月にかけて、宇七ツ尾山・高津保理山において林道拡幅により掘削される250m²について本発掘調査を実施した〔砺波市教委a:2003〕。結果、明確に造成された郭の存在が確認され、城域内では初となる掘立柱建物跡を検出するなど多くの資料を得ることができた。

なお、切り通し壁面の炭焼きの痕跡については、遺構として明確にとらえることができなかつたため、記録保存等の保護措置は行わず、工事立ち会いをもって対応した。

平成15年度には施工面積1,904m²を予定しており、調査対象地の裏亀山地区は、周知の埋蔵文化財包蔵地である増山城跡の範囲内には含まれてはいないが、増山城跡に隣接することと、所在地が平坦であり基盤整備を行われていないにもかかわらず方形な区画が残っていること、そして試掘調査に先立つ現地踏査において中世のものと考えられる陶器片を探集したことから、試掘調査を実施した。結果、遺物の出土はなかつたが、明確な遺構が検出されたことから、本発掘調査をもって対応することとなった。

第2節 試掘調査の結果

林道増山城跡線道路改良事業に伴い、増山城跡の隣接地である裏亀山地区の保護措置を講じるための資料とすることを目的とし、事業予定地における試掘調査を実施した。また、合わせて林道計画路線に隣接する水田・畑の区画整理部分も調査を実施した。

調査対象地は、砺波市増山字裏亀山に所在し、調査対象面積は、約1,149m²、現況は水田である。調査は、平成14年10月24日（木）から10月25日（金）までの実労2日で実施している。

調査は、重機（バックホウ）及び人力で地表面から地山である褐色粘質土まで掘り下げ、遺構・遺物の遺存状況を確認した。地形状況等を勘案し、合計8本の試掘トレーニングを設定している。掘削総面積は、75.35m²であり、これは調査対象面積1,149m²の約6.5%にあたる。

（1）基本層序

調査対象地内の基本層序は、以下のとおりである。

今回の試掘対象地内においては、戦後の区画整理などで土地を改變した際に地山を含む旧地形が大きく削られている状況が確認できた。2T～6Tでは、表土直下に地山粘質土が広がっていた。3Tは、南北に長いトレーニングであり、和田川につながる旧地形を把握することを目的に設定したものであるが、地山は平坦に堆積しており、削平を受けていることを物語るものと言える。

1Tでは、遺構が検出された。②層から掘り込まれたものと、④層堆積前に掘り込まれたものがあった。④層は、1Tのみで確認された青灰色層であり、遺物包含層の可能性もある。7Tでは、層厚10cmにも満たない表土を除去すると地山が広がっていた。地山には砂利や砂を含んでおり、洪積世における旧河道が存在していたことが明らかとなった。

8Tは、調査対象地内ではもっとも土地改變の影響を受けていない場所であった。トレーニング西側に⑤層・⑥層の黒色層が堆積しており、和田川方面へ地形的に傾斜している様子が窺える。⑥層は、地山直上に形成されている。増山遺跡試掘や増山城跡〔砺波市教委：2003a〕で確認された黒色有機質層と比べ若干植物遺体が少ないようであり、質的にはやや異なるが堆積年代は同時期かもしれない。⑥層を人力で掘削したが、遺物は検出できなかった。

（2）遺構の年代と性格

1T・2Tで良好に遺構を検出した。②層から掘り込まれたSP01と、④層堆積前に掘り込まれたSP02・SP03・SK01、そして掘削層位を確認できなかったSK02がみられた。

遺構検出後、遺構の年代や性格について詳細な情報を得るために平面記録作業を行なったのち人力による断ち切り作業を行なった。SP01は単層の遺構であり、底部断面は平坦であるため、柱穴の可能性が高い。SP03は、柱根痕跡を有するピットである。裏込めと考えられる埋土には、地山ブロックが多く含まれる。SK02は、平面プランが方形を呈する土坑である。埋土を掘っていくうちに河原石が1点出土した。SK01は、南北2m以上、東西1.2m以上の規模であり、深さ約70cmである。埋土には炭塊が多くみられたことから伏せ焼きの炭窯と考えたが、炭が混ざるのは検出面のみであったため、その可能性は低い。底部は船底状を呈する。

（3）保護措置が必要な範囲

先述したように1T・2Tにおいて遺構が検出されたため、記録保存等の保護措置が必要な範囲は、1T・2Tを含む153m²とする。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

増山裏亀山遺跡の所在する砺波市は、富山県の西部中央にある。面積は96.31km²、人口41,976人（平成16年7月31日現在）であり、東経136度54分～137度04分、北緯36度33分～36度41分に位置している。

砺波市は、市名の由来ともなっている砺波平野に広がっている（佐伯:1979）。砺波平野は、大部分が市東部を北流する庄川により形成された扇状地が占めている。庄川は、その源を岐阜県莊川村に発し、高岡市を経由して日本海に注ぐ。流路延長115km、流域面積1180km²、平均河床勾配1/120～1/800の規模をはかる（富山県:1992）。

庄川扇状地は県内の三大扇状地に数えられ、そのなかでも最大の規模を誇る。扇頂部である庄川町青島から扇端部である高岡市南部の湧水帯までの距離は13～15km、面積は146km²に及ぶ。庄川扇状地には、地理学上著名な散村（Dispersed Settlement）が広がっている。また、大日本帝国陸地測量部が明治43年に発行した2万分の1縮尺の地形図『出町』『長澤』をみると、庄川の変遷を示す河道の痕跡が放射状に残っているのが確認できる。また、庄川扇状地の勢いに押されるようにして小矢部川は、庄川の排水河川の役目を果たし砺波平野の西端部を流れている。

庄川の右岸には台地がひろがり、河川作用によって形成された河成（河岸）段丘が存在している。それらは低位段丘、中位段丘、高位段丘として分類することができる。庄川町庄から宮森までの主要地方道新湊庄川線以東には、低位段丘が存在しており、隆起扇状地堆積物が形成されている。頬成・権正寺・東保では、庄川右岸に沿う帶状の自然堤防の微高地に集落が発達している。

高位段丘にあたる芹谷野段丘（福岡段丘）は、旧扇状地の右扇の一部が残存し段丘となったものである。南は安川付近から北は大門町串田付近まで約10kmに広がり、福岡の嚴照寺周辺では海拔30mを測る。芹谷野段丘上は、近世に庄川から芹谷野用水が引かれ、集落が開けた。

芹谷野段丘の東、蛇行する和田川の両岸には中位段丘が形成されており、和田川流域段丘帯をなしている。和田川は、牛岳の北西側山中に源を発し、庄東山地と芹谷野段丘の間を大きく蛇行し、池原付近で坪野川が合流する。流路延長23.5km、庄川の支流である。昭和43年、和田川総合開発事業により和田川ダムが竣工、和田川は堰き止められて増山湖ができる。

和田川の右岸に位置する増山城跡は、一般に庄東山地・音川山地と呼称される範囲に含むことができ、富山県を東西に分断する射水丘陵帶の一枝群を成している。この山地は起伏量が少ない丘陵性小起伏山地であり、地質的には青井谷シルト質泥岩層の範囲に含まれる。

また、南に位置する東別所新山山地は標高200m余りを最高点として100m余りの小起伏山地で構成されている。この山地の西北に位置する天狗山（標高192m）の北斜面、県民公園駒成の森の緩斜面丘陵は、南側山地からのかつての扇状地性堆積層で構成されている。表層地質としては、砂岩を主体とする下部と無層理青灰色泥岩を主体とする上部から成っている。



第2節 歴史的環境

砺波市には129箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在する（2004年7月31日現在）。ここでは増山裏龜山遺跡（1）を中心として市内の遺跡について概観する。

あけぼの 旧石器時代の遺跡は、庄川右岸の音川山地や芹谷野段丘に分布する。音川山地には芹谷遺跡（28）、池原遺跡（29）、増山貝喰山遺跡・頬成D遺跡（26）、芹谷野段丘には高沢島I・II遺跡（7）などがある。市内において旧石器が注意されたのは、昭和48年頃の芹谷遺跡がはじめてであり、住蔵久雄氏の業績による。氏の発見以来、100点以上の石器が表面採集され、それらは「立野ヶ原型ナイフ形石器」と呼ばれる鉄石英・玉髓でできた小形剥片と、濃飛流紋岩類・容結凝灰岩によるナイフ形石器や彫器で構成されるという（西井：1990）。

縄文縁 旧石器と分布を同じくし、縄文文化の花がひらいた。高位段丘である芹谷野段丘では、上和田遺跡（25）（中・晚期）、嚴照寺遺跡（21）、宮森新天池遺跡（24）、宮森新北島I遺跡（17）（前・中・晚期）、頬成新遺跡、三合遺跡がある。また、中位段丘である和田川流域段丘帯には、高沢島I・II遺跡（7）、増山遺跡（5）などがある。市内における縄文時代の遺物は古くからその存在が知られ、大正13年頃、孫子の上原地内において県内でも稀少なバナナ形石器が出土している。中尾遺跡から出土した御物石器は、前田円蔵氏が所蔵しており〔梅樟山村史刊行会：1976〕、現在福岡の嚴照寺にて保管され市指定文化財となっている。

芹谷野段丘縁辺に存在する嚴照寺遺跡（21）は、市内の縄文時代遺跡として最も著名である。名越仁風氏ら地元研究家や富山考古学会の働きかけで周知されるようになった嚴照寺遺跡は、梅樟野地区圃場整備事業に先立ち昭和50・51年に試掘調査、昭和51年に本調査が実施された。本遺跡から出土した土器群は、現在「嚴照寺I式・II式・III式」として、新崎式とともに中期前葉の地域的な標式となっている。遺構では、堅穴住居跡11棟・埋甕1箇所・穴などが検出され、典型的な弧状集落であることが判明した。

低地では庄川以東の低位段丘上に宮森遺跡（19）、徳万遺跡（33）、東保石坂遺跡（11）など、芹谷野段丘を抉る谷口に存在する。しかし、久泉遺跡（40）の発掘調査では、扇状地扇尖部において初めて縄文時代遺跡を発見するという新たな動きもみられる。

空白の時代 弥生時代・古墳時代は、現在のところ砺波市においては空白の時代と言わざるをえない。社会基盤が稻作經營に移行したことにより連動し、人々が扇状地でも湧水帯の多い扇端部に移住したことに起因するものと思われる。池原には“丸山古墳”や県指定史跡であった“狐塚古墳”があり、現在古墳と見る研究者は少ない。わずかな資料として、福山大堤遺跡や安川野武士遺跡B地点出土のものが該期の可能性がある。古墳時代資料としては、高沢島III遺跡（8）の例があげられる。土師器の甕や高杯の一部が出土しており、古墳時代後半と考えられる。また、増山城跡（2）の又兵衛清水付近から内面に刷毛目調整を施した土師器片が出土している〔安念：1991〕。

古代の風 飛鳥・白鳳時代も資料はなく、奈良時代に入ると庄川扇状地の扇尖部や芹谷野段丘などで遺跡が点在する。庄川扇状地東部に展開したとされる東大寺領農田の石粟莊・伊加流伎莊・井山莊と密接な関わりがあることは想像に難くない。それら莊園の展開と同じ頃、梅樟野窯跡群が操業をはじめる。梅樟野窯跡群の増山支群である宮森窯跡（15）と、福山支群である安川天皇窯跡が8世紀半ばに須恵器生産を開始している〔西井：1994〕。8世紀後半になると、増山支群では増山龜田窯（6）、増山閉子地窯（4）、増山妙覺寺坂窯（9）、福山支群では福山窯、福山小堤窯、福山大堤窯が操業している。この後、梅樟野窯跡群では10世紀頃まで須恵器生産が続けられる。

砺波郷土資料館収蔵の福山須恵器窯跡出土品は、市指定文化財となっている。昭和37年7月に砺波市史編纂委員会が中心となり【砺波市史編纂委員会ほか：1962】、発掘調査を実施している。出土品には、水煙・屋蓋・輪・基壇など瓦塔の一部や円面硯、土馬など特記すべきものが多数ある。しかし、須恵器窯跡に対して、供給地となる遺跡の存在はあまり知られていない。東大寺領莊園周辺では、庄川右岸に徳万頼成遺跡(39)、左岸では秋元雀田鳥遺跡(37)や久泉遺跡(40)が集落として知られるにすぎない。また、扇状地上では、太田遺跡、高道遺跡、千代遺跡、宮村遺跡、小杉遺跡などが旧河道沿いのマッドと称される微高地に存在しており、扇状地東側の整田開発と時を同じくして扇丘部への開発が進んだことを物語る。

中世の動乱 千保川東岸に広がる般若野一帯には、徳大寺家領般若野荘が成立した。荘城にある遺跡として、13世紀前半に比定できる東保遺跡(東保高池遺跡)(38)が知られる。南北朝時代には、二宮円阿軍忠状に「和田城」という城名がみえ、増山城に先立ち構築された亀山城という説が有力である。亀山城は、郭の配置や全体的な規模等から増山城より古い段階の構造をもつ。

室町時代に神保氏が婦負・射水郡の守護代となり、はじめ亀山城を使用していたが、本城である放生津城の支城として亀山城を修築したとされる。永正3年(1506)、一向一揆を攻めるために進軍した越後守護代長尾景景が増山城に近い岸谷の合戦で討死していることから、軍事的緊張の高まりがうかがえ、亀山城の整備が行われ現在の姿に近い形になったようである。天文年間頃、神保長職が富山城の支城として増山城が構築されたと考えられる。このうち増山城は、長職を追撃した上杉謙信の手に落ち、永禄年間後期に長職と上杉が結んで一向宗徒を攻撃したときには、長職の本拠となっている。また、長職没後、一時的に反上杉方が居を構えるが、天正4年(1576)に謙信に攻められ落城し、天正9年(1581)に織田方に焼き払われている。天正11年(1583)以降、越中統一を果たした佐々成政によって修築された増山城は、この時もっとも城域が広く完成した姿をしていたものと考えられる。成政のうち、増山城は前田方の手に渡り、城の守将となった中川光重が退老もしくは没した慶長年間まで存続したと考えられる。

No	遺跡名	時代	種別	No	遺跡名	時代	種別
1	増山裏亀山遺跡	中世・近世	散布地	21	巣照寺遺跡	繩文	集落
2	増山城跡	鎌倉・室町	山城	22	宮森新経塚	不明	経塚
3	増山泡ノ平等塚跡	奈良・平安	窯	23	巣照寺境内遺跡	鎌倉?	
4	増山団子地窯跡	奈良	窯	24	宮森新天池遺跡	繩文	散布地
5	増山遺跡	繩文・奈・平・中・近	散布地・集落	25	上和田遺跡	繩文中・晚	散布地
6	増山亀田窯跡	奈良	窯	26	賴成D遺跡	旧石器	散布地
7	高沢鳥I・II遺跡	旧・繩・奈・平・近	散布地・集落	27	千光寺境内遺跡	中世・近世	寺院
8	高沢鳥III遺跡	奈良・平安	散布地・集落	28	芹谷遺跡	旧・繩文・古代	散布地
9	増山妙覺寺坂窯跡	奈良	窯	29	池原遺跡	旧・繩文・古代	散布地・製鉄
10	増山西遺跡	不明	窯	30	狐塚	中世?	その他
11	東保石坂遺跡	繩文中・奈・縄	散布地	31	須蘇末岬遺跡	古代	製鉄
12	東保石坂南遺跡	古代	散布地	32	金クソ山遺跡	古代	製鉄
13	行者塚	不明	その他	33	徳万遺跡	繩文中・後・古・中	散布地
14	宮森庵寺	鎌倉・室町	寺院	34	長尾為景塚	不明	その他
15	宮森窯跡	奈良	窯	35	長尾能景塚	不明	その他
16	宮新遺跡	奈良	散布地	36	鎌の土居跡	中世	城郭
17	宮森新北島I遺跡	繩文前・中・晚	集落	37	秋元雀田鳥遺跡	古代・中世	集落
18	光明眞言塚	不明	庭園?	38	東保遺跡(東保高池遺跡)	平安・鎌倉	不明
19	宮森遺跡	繩文	散布地	39	徳万頼成遺跡	繩・古墳・古代・中世・近	集落
20	大谷島遺跡	繩中・晚・奈・平	散布地	40	久泉遺跡	繩・奈・平・室・近	集落

表1 増山裏亀山遺跡と周辺遺跡一覧表



第1図 増山裏亀山遺跡と周辺遺跡 Scale=1/50,000

※この地図は国土地理院長の承認を得て同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。(承認番号) 平16北緯、第101号

第3章 調査の成果

第1節 調査方法と調査経過

調査計画 調査範囲が狭いことから、グリッドによる遺物取り上げは行わないこととした。調査計画は、試掘調査で得られたデータを基に、遺構面の数と包含層の厚さから包含層掘削土量を割り出し、その計算から得られた数値を「富山県埋蔵文化財発掘調査実施要綱・基準」に照らし、各調査工程に要する日数を算出したうえで調査体制及び計画を策定した。試掘調査結果から、遺構面を1面確認している。

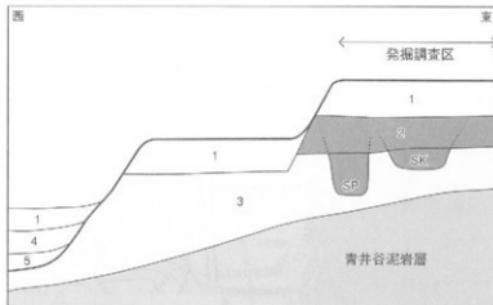
現地調査 現地調査は一般的な発掘の手順（表土・盛上除去→包含層掘削→遺構確認面の精査・遺構検出→遺構掘削→記録作業→写真撮影→遺構測量→補足作業）を行った。包含層掘削にあたっては、調査区にし字にサブトレーナーを設定するとともに試掘トレーニング面で土層断面を確認しながら掘り下げた。また、小規模な土坑やピットについては、遺構検出したのちに5cm程度掘り下げる状態で記録し、測量後に遺構断ち割りを行い断面の記録作業をするという手順をとった。

調査日誌抄	8/1	事前準備	8/11	遺構掘削
	8/2	表土除去	8/25	調査区全体写真撮影
	8/4	人力掘削開始	8/29	調査終了
	8/5	遺構検出		

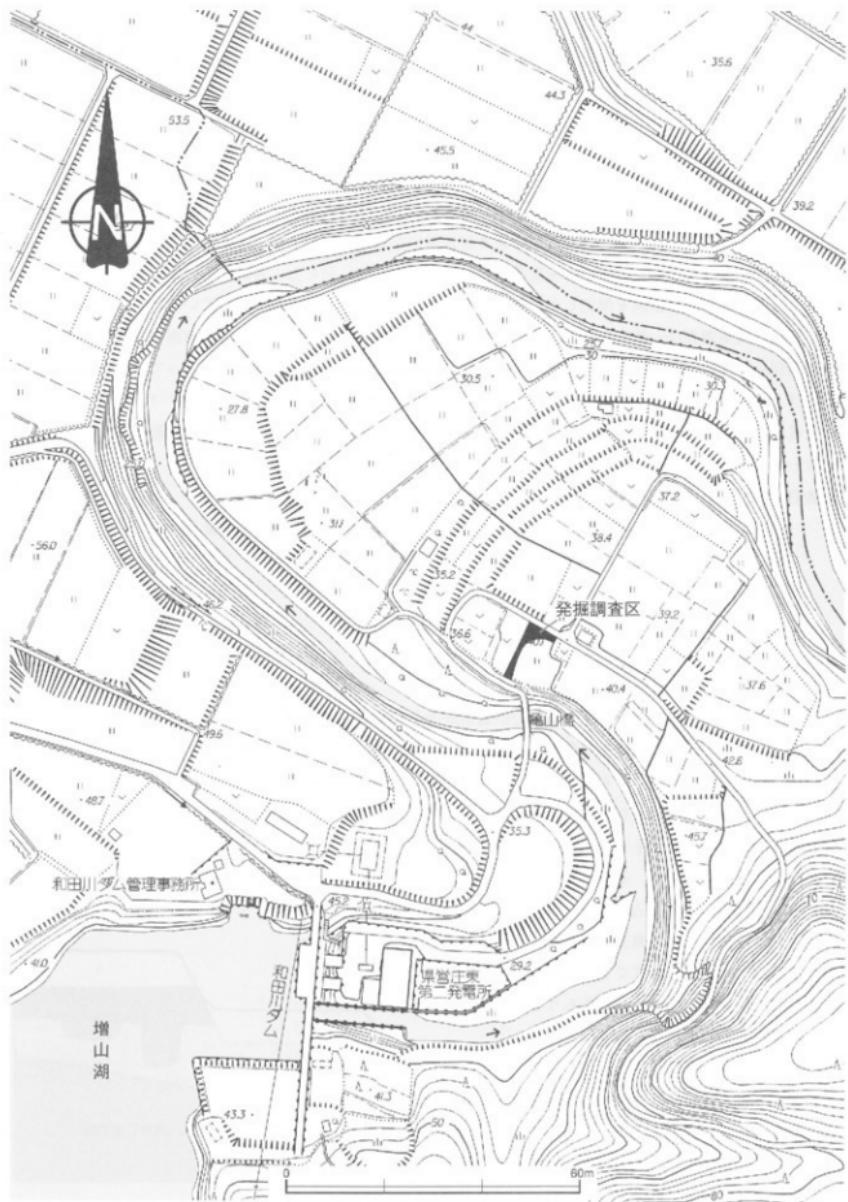
第2節 基本層序

試掘調査対象地においては、地山を含む旧地形が大きく改変されている状況が確認できた。その中で今回の調査区内は、比較的地形改変の影響を受けておらず、遺構の遺存状況が良好であった。調査区内における層序は比較的単純なもので、1層の表土と3層の地山粘質土の間に2層褐色土が存在する。2層上層にはさらに層位が存在したと思われる。遺構は、3層上面において確認できたが、遺構埋土と②層が近似すること、3層上面において生活痕を示すような堆積がみられないことから、遺構自体は少なくとも2層中から掘り込まれて形成されたものと考えられる。調査区北壁で2層上面において遺構が確認できたことから、あるいはかつて存在したであろう2層上層から掘り込まれて遺構が形成された可能性も考えられる。

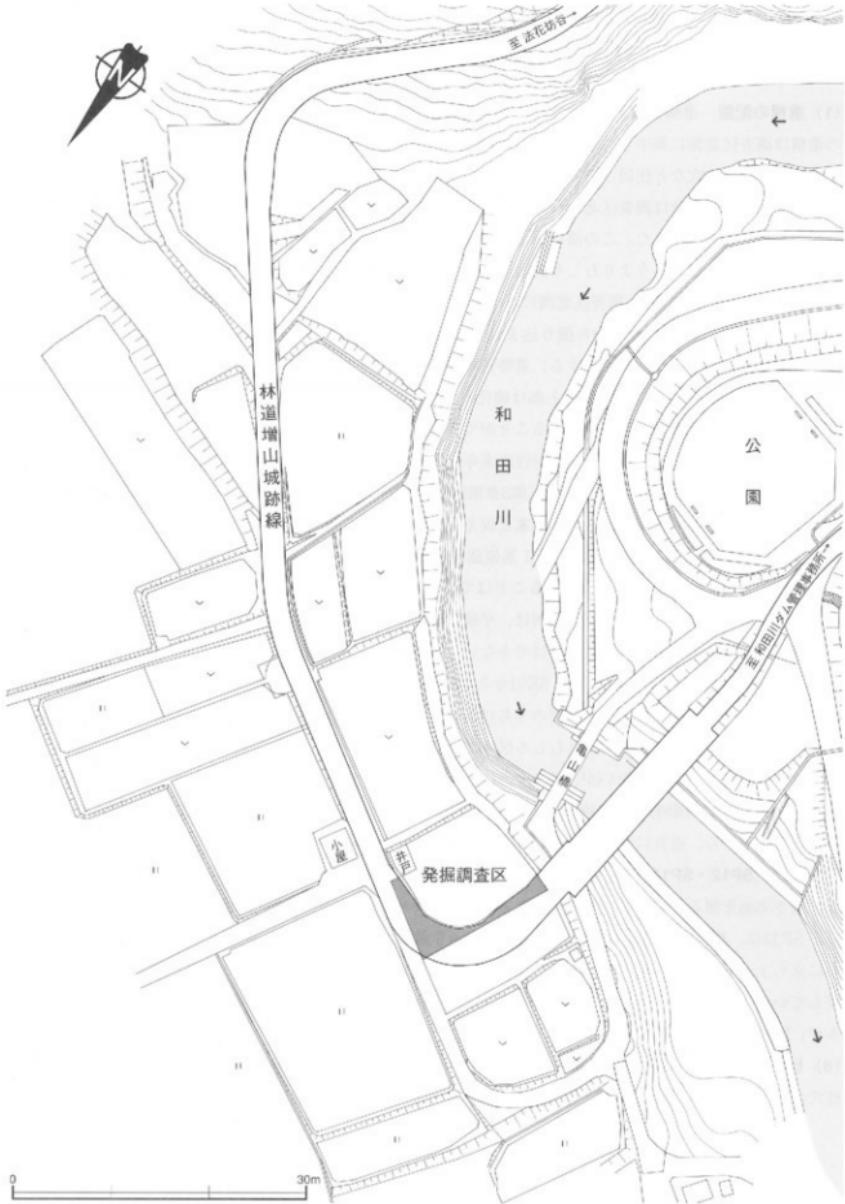
遺物は2層中から検出されたが、遺物包含層と呼ぶ程に多く含まれていない。地山である3層は、褐色の粘質土であり、確認できたところでは70cm程度の堆積がみられた。



第2図 基本層序模式図



第3図 発掘調査区位置図(1) Scale=1/2,500



第4図 発掘調査区位置図(2) Scale=1/500

第3節 遺構

(1) 遺構の配置 遺構は調査区において、竪穴状遺構、土坑、溝、柱穴、ピットが確認できた。ほとんどの遺構は調査区北側に集中しているが、これは調査区設定の制約によるものと思われる。

竪穴状遺構や柱穴など住居（建物）に関連した遺構が検出されたが、それぞれ有機的な関係性をもつものではなく、対応する遺構は調査区北の現林道下に存在する可能性が高い。調査区は南に細長く伸びており、平行して溝が2条確認された。この溝は、掘り方もしっかりしているものの、水底堆積物等は見受けられることから、用排水溝というよりむしろ区画溝のような性格を有しているものと考えられる。

(2) 竪穴状遺構（SK01） 調査区北西において1基のみ確認された。検出面での規模は、長軸4.0m×短軸2.5mを測るが、実際は2層中から掘り込まれているため、さらに大きくなる。平面形態は南北に長い長方形を基調とし、北東隅がやや突出する。遺物量は少なく、①層から中世から近世に属する土師器の細片が出土した。埋土は2層から成り、②層上部は硬化していた。なんらかの構造物に伴う遺構と考えられたため、周辺に付属する遺構を探したが検出することができなかった。

また、埋土から出土した炭化物で放射性炭素年代測定を行なったところ、①層：西暦1603年・1609年、②層：西暦1645年という年代が得られた（第3章第5節）。②層が下位にあることから、年代的には逆転現象が生じているが、これは伐採年代による現象と捉えたい。いずれも近世前期に含まれる。

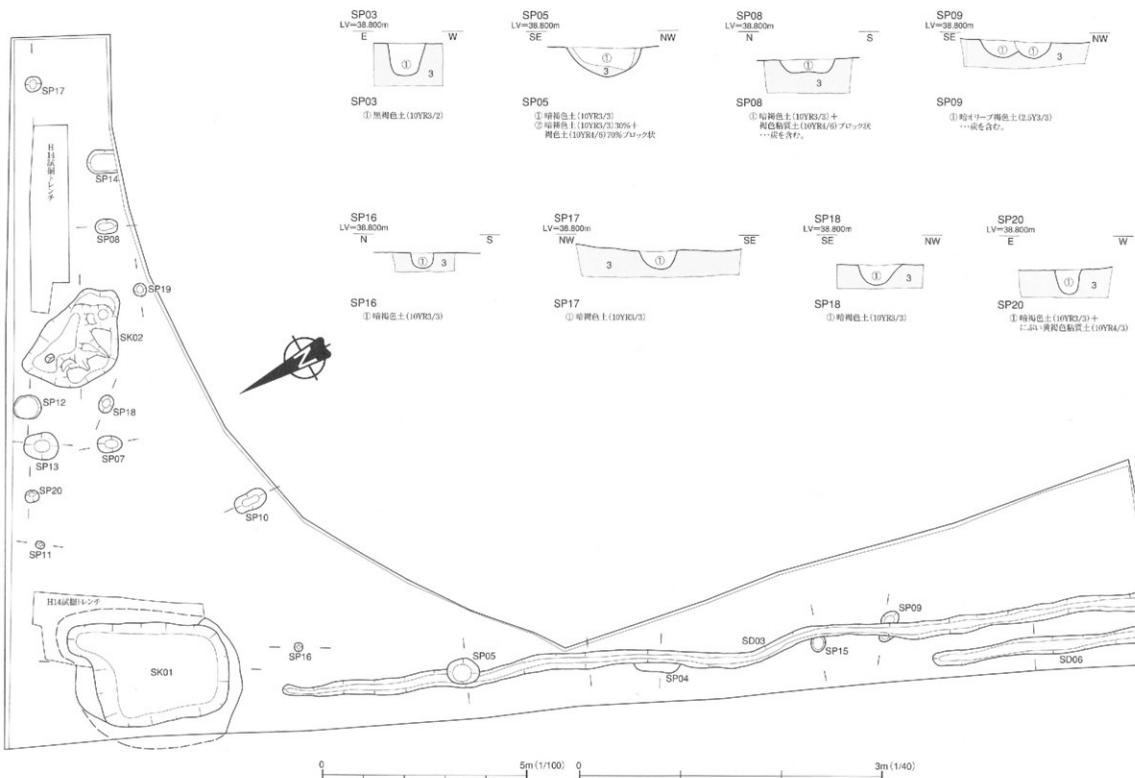
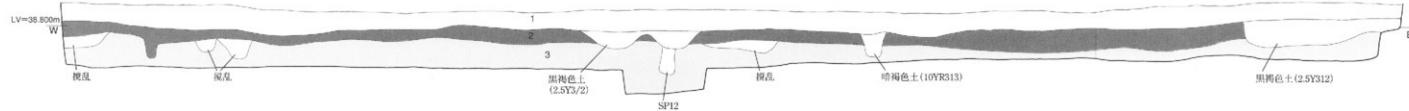
(3) 土坑（SK02） 調査区北において1基確認された。平面形態は、不正円形を呈す。内面は凹凸が激しく、意図的に造成されたものと判断することはできないが、底部に礫が1点据えられたように検出された。このように土坑内底部に礫を据える事例は、平成14年度の坪野遺跡試掘調査においても確認している。遺物はなかったため、年代を推定することはできない。性格も不明である。

(4) 溝（SD03・SD06） SD03は、SK01から直線的に南へ延びている。検出面からの深さは40cmを測る。埋土が単層であるため、比較的短期間のうちに埋まつたと考えられるが、断面で水底堆積物が確認できなかつたことから、用排水路というよりむしろ区画溝のような機能を推定することができる。遺物の出土がないので、使用年代は確定できないが、埋土がSK01のそれと近似することから同時期に機能していたものと考えたい。SD06は、SD03に比べ検出面からの掘り込みは浅い。遺物は、越中瀬戸（6）、土師器（8）が出土していることから、近世に属する遺構の可能性がある。

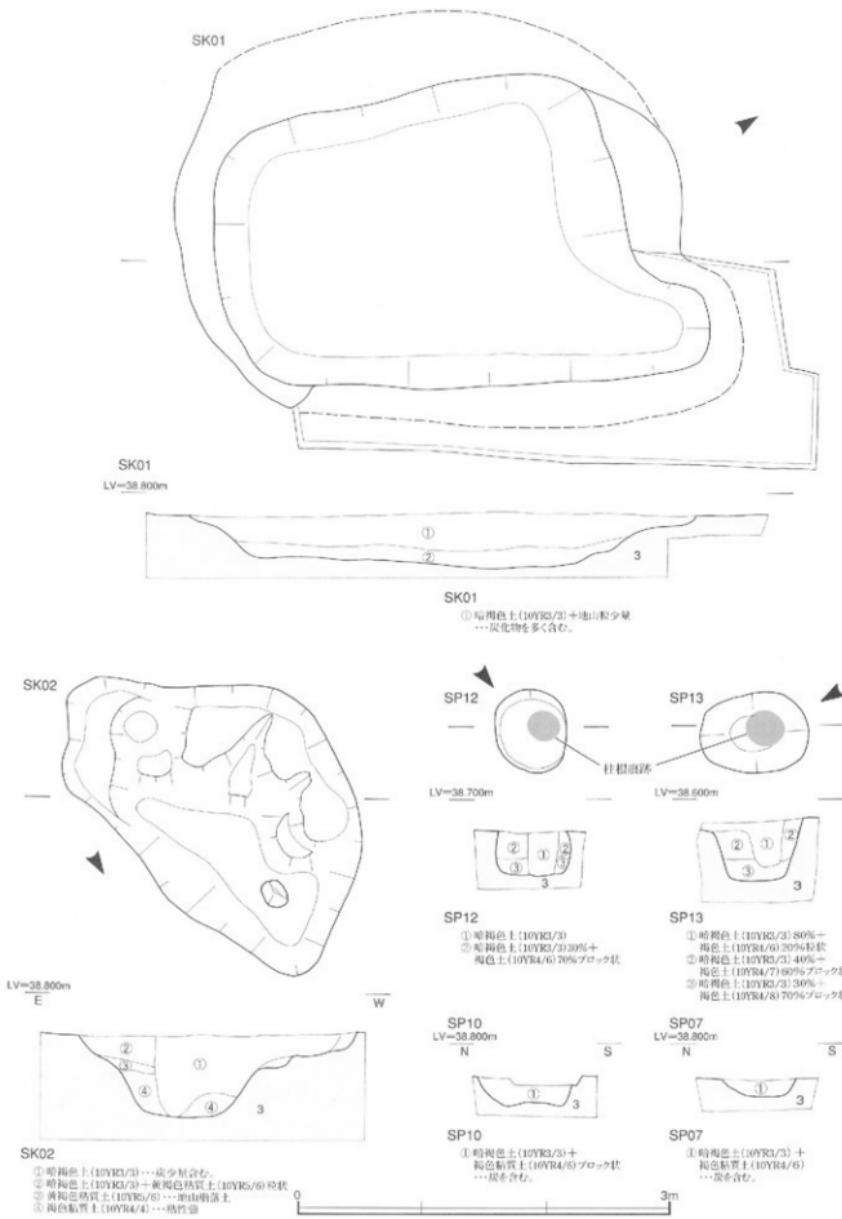
(5) 柱穴（SP12・SP13） 柱穴と考えられる遺構は、2基検出された。SP12は、検出面での規模が径55cm、深さ35cmを測る。底面は平坦で、掘り方はややオーバーハングするように立ち上がる。遺物の出土は無い。SP13は、検出面での規模が径80cm、深さ50cmを測る。底面は平坦で、掘り方は上方に向かって聞くように立ち上がる。遺物の出土は無い。いずれも断面で柱根痕跡が認められたこと、埋土が自然埋没の様相を呈していないこと、そして底面が平坦であることから柱穴と判断した。SP12・SP13の柱根痕跡の底レベルが、同じ38.05mである。

(6) ピット（SP04・SP08・SP09・SP16・SP17・SP18・SP20） 調査区において、7基確認した。柱穴の抽出作業で省かれたものである。いずれも埋土が単層であり、遺物の出土は無かった。

調査区北壁断面 (Scale=1/50)



第5図 調査区全体図 (Scale=1/100), 遺構断面図 (Scale=1/40)



第4節 遺物

ここでは今回の調査で出土した遺物についてその概要を述べる。詳細は遺物観察表（表2）を参照されたい。なお、図化しうるものは少なかったため、遺物番号は図版5に従っている。

調査区内において遺物の出土は極少量にすぎなかつた。総量で遺物整理箱1箱程度である。ほとんどが2層内（遺構検出面直上）からの出土であり、遺構内では、SK01・SD06からはわずかに土師器片が出土した。出土遺物の帰属年代は、概ね古代、室町時代から近世に属する。

（1）遺構内出土遺物

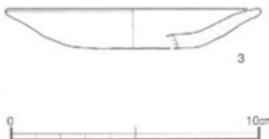
SK01（図版5-1, 4, 5, 12） ①層から中世から近世にかけてと考えられる土師器（1・4・5）が出土した。いずれもと思われるが、細片のため編年的位置付けを行なうことは難しい。また、①層からは被熟痕のある扁平な碟が出土している。

SD06（図版5-6・8） 越中瀬戸（6）・土師器（8）が出土している。6は、越中瀬戸の皿で鉄軸がかかる部分と無軸部分が残る破片である。形状がわからないので詳細な年代は不明だが、17~18世紀に帰属するものと考えられる。8は、土師器片であるが中世土師器と胎土が異なり、やや粗いことから、古代に属するものと考えられる。器種は不明である。

（2）2層出土遺物（図版5-2・3・7・9~11）

中世土師器皿（2・3）、土師器（7）、近世陶磁（9~11）が出土している。3は、中世土師器のなかでも唯一編年的位置付けが可能である。底部から直線的に口縁部へ立ち上がり、端部が尖る。これは、宮田編年におけるVI期に相当する特徴であり、16世紀後半の年代を与える（宮田進一：1997）。

9は越中瀬戸で、匣鉢状容器と考えられ、17世紀の年代を与えることができる。10は、肥前系陶磁の陶胎染付であり、18世紀と考えられる。



第7図 出土遺物実測図 Scale=1/2

番号	出土地点	種類	器種	口径 (cm)	口径残存率 (%)	底径 (cm)	底径残存率 (%)	器高 (cm)	備考（焼成・胎土）
1	SK01①層	中世土師器	皿	—	—	—	—	—	
2	2層	タ	タ	—	—	—	—	—	
3	タ	タ	タ	10.4	25	—	—	1.6	16世紀後半。
4	SK01②層	タ	タ	—	—	—	—	—	
5	タ	タ	タ	—	—	—	—	—	
6	SD06	越中瀬戸	皿	—	—	—	—	—	17~18世紀
7	2層	土師器	—	—	—	—	—	—	古代か？
8	SD06	土師器	—	—	—	—	—	—	古代か？
9	2層	越中瀬戸	匣鉢状容器	—	—	—	—	—	17世紀。鉄軸あり。
10	タ	近世陶磁	小杯	—	—	—	—	—	肥前系？陶胎染付。18世紀
11	タ	近世陶磁	皿	—	—	—	—	—	肥前系？18世紀
12	SK01①層	石	—	—	—	—	—	—	被熟痕あり

表2 出土遺物観察表

第5節 自然科学分析

株式会社中部日本鉱業研究所
考古事業部 墓藏文化財調査室

はじめに

増山裏亀山遺跡から出土した炭化材の年代測定・樹種同定を行なった。

1. 測定試料

測定試料は増山裏亀山遺跡出土の炭化材（サンプルNo1,2）である。

サンプルNo1：SK01の①層より採取。

サンプルNo2：SK01の②層より採取。接合不可能破片が多数の混入ため、複数種類か単一種類の確認も行った。

2. 測定方法

（1）放射性炭素年代測定

炭素は生物に含まれる主要元素の一つであるとともに、考古学試料に含まれており、炭素14年代測定が最もよく用いられている。

加速器質量分析法（AMS法）を用いて実施した。同分析法は、タンデム型加速器を用い、特定の原子を原子量の違いで、測定する方法で炭素14だけを測定できる。

放射性炭素の半減期は5568年を用いた。

分析には株式会社加速器分析研究所の協力を受け、測定年代の曆年代への変換についてはワシントン大学の船年代プログラム「Radiocarbon Calibration Program REV 4.1.2」を用いて当社にて実施した。

（2）樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接続断面）の3断面の削断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定した。

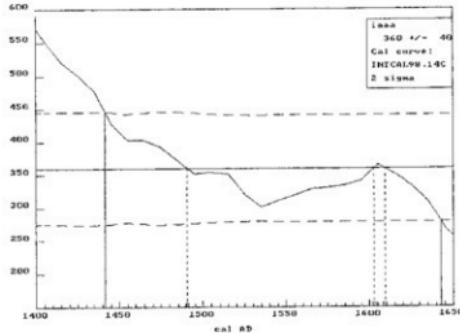
3. 測定・分析結果

(1) 放射性炭素年代測定結果

サンプルNo.1（試料ID:IAAA-31350）：

- ・測定年代：360±40BP
- ・「Radiocarbon Calibration Program REV 4.1.2」による暦年代：
切片法による年代交点 西暦 1442年・1491年・1603年・1609年・1642年
確立分布法による年代範囲 西暦 1538年～1636年（確立54.4%）
*校正グラフ参照

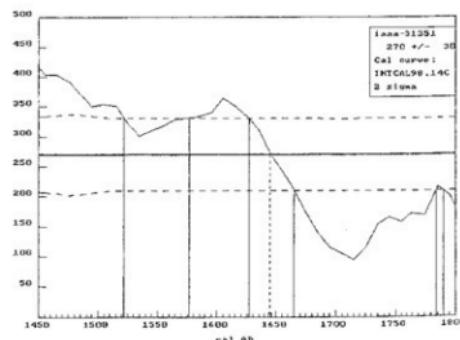
切片法による年代交点から西暦1442年・1491年・1603年・1609年・1642年、また確立分布法による年代交点から西暦 1538年～1636年（この間に含まれる可能性54.4%）という測定値が得られた。切片法によって得られた測定値のうち確立分布法による年代範囲内に納まるものが暦年代として信頼性が高いことから、西暦1603年・1609年が最も的確と考えられる。



サンプルNo.2（試料ID:IAAA-31351）：

- ・測定年代：270±30BP
- ・「Radiocarbon Calibration Program REV 4.1.2」による暦年代
切片法による年代交点 西暦1637年・1645年・1656年
確立分布法による年代範囲 西暦1633年～1660年（確立69.4%）
*校正グラフ参照

切片法による年代交点から西暦1637年・1645年・1656年、また確立分布法による年代交点から西暦 1633年～1660年（この間に含まれる可能性69.4%）という測定値が得られた。切片法によって得られた測定値のうち確立分布法による年代範囲内に納まるものが暦年代として信頼性が高いことから、西暦1645年が最も的確と考えられる。



(2) 樹種同定分析結果

サンプルNo.1 (SK01 ①層採取) 一広葉樹のイヌザンショウ

イヌザンショウ (*Fagara mantchurica* Honda) ミカン科

イヌザンショウ属

やや環孔材的な散孔材で、年輪界の始めにやや大型の道管が配列し、単独または2~3個が主として放射方向に複合して年輪界に向かって径を漸減させながら散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~20細胞高。

サンプルNo.2 (SK01 ②層採取) 一針葉樹 1種類 (マツ属複維管束亞属)

広葉樹 2種類 (クスノキ科・モチノキ属近似種)

マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen.*Diploxyylon*) マツ科

輻方向組織は、主として仮道管で構成されるが、晩材部付近には垂直樹脂道も認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は急~やや緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は、柔細胞、仮道管、樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顯著な銀歯状の突出が認められる。放射細胞は單列、1~15細胞高。

クスノキ科 (*Lauraceae* sp.)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った椭円形、単独または2~3個が放射方向に複合して散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周間状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

モチノキ属近似種 (cf. *Ilex*) モチノキ科

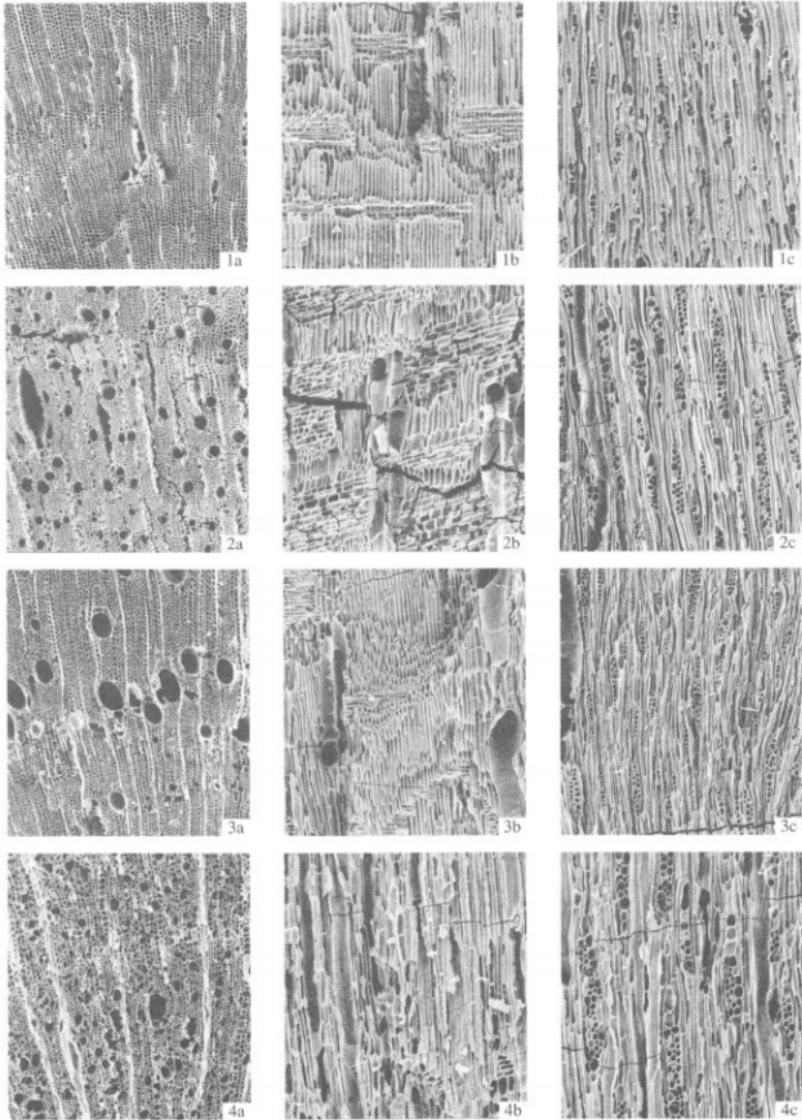
散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2~5個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1~5細胞幅、1~20細胞高。

以上の特徴は、モチノキ属によく似ているが、保存状態が悪く、道管内壁の壁孔や螺旋肥厚の有無が観察できなかったため、近似種とした。

炭化材は、全て SK01から出土したものであるが、①層の炭化材と②層の炭化材が同時期のものか否か等の詳細は不明である。造構内から出土したことや炭化していることから、何らかの人为的行為により炭化したことが推定される。

炭化材の樹種は①層がイヌザンショウで、②層からはマツ属複維管束亞属、クスノキ科、モチノキ属(近似種)の3種類が認められた。層によって、種類構成が異なるようにみえるが断定はできない。これらの炭化材のうち、マツ属複維管束亞属は薪炭材や上木材等に有用な種類である。一方、イヌザンショウ、クスノキ科、モチノキ属(近似種)も薪炭材に利用されることもあるが、特に優良な種類ではない。

今回の分析結果では種類構成が多く、また、周辺に生育していた可能性のある樹種が検出されているため、利用した木材の特定は難しく、周辺に植生する木材を利用したことが推定される。



1. マツ属複維管東亜属 (SK01; ②層)
2. クスノキ科 (SK01; ②層)
3. イヌザンショウ (SK01; ①層)
4. モチノキ属近似種 (SK01; ①層)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

— 200 μ m:a
— 200 μ m:b,c

第4章 まとめ

今回の調査成果を総括し、まとめとしたい。

発掘調査地は、増山城跡の北西に隣接しているが、これまで城郭に関連して注意されることの無かった場所である。林道増山城跡改良工事に伴い分布調査を行なったところ、試掘調査の必要性が認識されたことが遺跡発見の端緒となった。

発掘調査では、近世初頭と考えられる遺構・遺物が検出された。堅穴状遺構（SK01）や柱穴（SP12・SP13）など建物に伴う遺構が発見されたことから、往時における生活（居住）空間であったことが推察できる。柱穴の年代は明らかでないが、SK01出土炭化物からは放射性炭素年代測定により17世紀前半の年代が得られ、中世土器が出土していることからも近世前半に帰属すると考えられる。また、SD06からも同時期の越中瀬戸が出土している。

昭和52年に圃場整備事業に先立ち、増山遺跡（増山城下町遺跡）の試掘調査が行なわれている〔砺波市教委：1978〕。その結果、遺物では13世紀後半から14世紀代の土器、16世紀末から17世紀代の土器が出土した。遺構では、建物、井戸、溝、穴、土壙、堀が検出され、増山城下町の様相の一端が明らかとなった。久々忠義氏は、増山城下町の存続期間について、「増山城に関する文書、城下にあったと伝承される寺の由緒、出土遺物、遺構のあり方」から、増山遺跡南半（No.4地区）について「天正13年（1585）から寛文3年（1663）まで約80年間の期間」を推定している〔久々：1991〕。

増山裏亀山遺跡で出土した遺構・遺物は、久々氏が推定している城下町の存続期間の範囲に含まれる。増山裏亀山遺跡まで城下町が広がっていたと短絡することはできないが、近世初頭において居住空間が存在した可能性は高く、少なくとも城下町と何らかの関連があったことは想像に難くない。

増山城とその城下の間には、和田川が北流しており、かつて神楽川という名で新湊の放生津城と結ばれていた。伝承によると、和田川べりに「昔、舟が着いて城へ物を上げていた所」と伝えられる場所があるという〔高岡徹：1990〕。増山裏亀山遺跡は、和田川に接しており舟が着岸するのに適当な場所にある。地形的にみて、かつての伝承地の候補のひとつに本遺跡が挙げられると考えられるが、今回調査で近世に属する居住施設に関連した遺構が確認されたことから、さらに可能性は高くなつたと思われる。

【参考文献】

- 安念幹倫 1991 「七・城跡群の遺物」『富山県指定史跡 増山城跡調査報告書』
砺波市教育委員会・砺波郷土資料館
- 池野正男 1987 「射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡」『大境』第11号 富山考古学会
- 井口村教育委員会 2002 『井口A遺跡発掘調査報告』
- 内田伸紀子 1998 「越中における古代土師器の編年予想」『富山考古学研究』創刊号
(財)富山県文化振興財団
- 上市町教育委員会 1985 『富山県上市町弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要』
- 経済企画庁 1970 『土地分類基本調査(石動)』
- 久々忠義 1991 「10 増山城城下町遺跡の発掘調査(昭和52年)から」
『増山城跡調査報告書 よみがえる戦国の山城と城下町』 砧波市教委・砺波郷土資料館
(財)富山県文化振興財団 2002 『清水島II遺跡・中名II遺跡・持田I遺跡発掘調査報告』
- (財)富山県文化振興財団 2002 『石名田木舟道路発掘調査報告』
- 佐伯安一 1979 「砺波市」『角川日本地名大辞典 16 富山県』 角川書店
- 酒井重洋 1998 「中世土師器の分類について」『富山考古学研究』創刊号 財團法人富山県文化振興財団
- 柳原滋高 2001 「柱穴の調査方法を考える」『掘立と堅穴』
- 塙田明弘 2002 「越中(富山縣)の様相」『中亞北陸の城館と寺院』北陸中世考古学研究会
- 柿櫻山村史刊行会 1976 『柿櫻山村史』
- 高岡做 1990 「増山城と中世の城館」『砺波市史資料編 1 考古・古代・中世』 砧波市史編纂委員会
- 砺波市教育委員会 1978 『富山縣砺波市梅稟野道路群予測調査概要』
- 砺波市教育委員会 1998 『平成9年度増山城跡総合調査概報 増山城跡I』
- 砺波市教育委員会 1999 『平成10年度増山城跡総合調査概報 増山城跡II』
- 砺波市教育委員会 1999 『高追向島遺跡』
- 砺波市教育委員会 2000 『平成11年度増山城跡総合調査概報 増山城跡III』
- 砺波市教育委員会 2001 『須森本跡A遺跡』
- 砺波市教育委員会 2002 『平成12・13年度増山城跡総合調査概報 増山城跡IV・V』
- 砺波市教育委員会 a 2003 『増山城跡発掘調査報告―林道増山城跡壁塗痕工事に伴う緊急発掘調査報告書―』
- 砺波市教育委員会 b 2003 『平成14年度増山城跡総合調査概報 増山城跡VI』
- 砺波市教育委員会 2004 『平成15年度増山城跡総合調査概報 増山城跡VII』
- 砺波市史編纂委員会・砺波市文化財審議委員会 1962 『砺波市福白(慈方赤坂)須恵器発掘報告』
- 富山県 1992 「10万分の1富山県地図説明書」
- 富山市教育委員会 1984 『白鳥城跡調査概報(Ⅲ)』
- 富山地学会編 1986 『富山県の地形・地質』
- 西井龍儀 1990 「第1章 旧石器」『砺波市史資料編 1 考古・古代・中世』 砧波市史編纂委員会編
- 西井龍儀 1994 「利波郡における分室とその背景」『北陸古代土器研究』第4号
- 福岡町教育委員会 2002 『木舟城跡発掘調査報告』
- 宮田進一 1997 「第2節 越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会



図版1 空中写真 (昭和50年国土地理院撮影)

※この写真は国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。(承認番号) 平16北復、第101号



図版2 遺構(1) 1. 調査区近景(北東から) 2. 調査区近景(北西から) 3. 調査参加者 (後列: 西村、永森、島田)
(前列: 天野、信田、荒木)



図版3 遺構(2) 1. SK01 2. SK01断面 3. SK02 4. SD03 5. SD06 6. SP12 7. SP13



図版4 出土遺物 1・4・5・12:SK01 6・8:SD06 その他:2層出土

報 告 書 抄 錄

ふりがな	とやまけんとなみしますやまうらかめやまいせきはくつちようさほうこくりんどうますやまじょうせせんかくふくこうじにともなうきんきゅうはくつちようさほうこくしょー					
書名	富山県砺波市 増山裏亀山遺跡発掘調査報告 —林道増山城跡線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書—					
編著者名	野原 大輔（砺波市教育委員会生涯学習課 学芸員）					
編集・発行機関	砺波市教育委員会					
所在地	〒939-1398 富山県砺波市栄町7番3号 TEL0763-33-1111					
発行年月日	平成16年8月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査原因
		市町村	遺跡番号			
ますやまうら かめやまいせき	とやまけん となみしますやま あざうらかめやま			36° 39' 21"	137° 02' 28"	
増山裏亀山 遺跡	富山県砺波 市増山字裏 亀山	162086	208128	調査面積	調査期間	林道増山城跡線の拡幅
				153m ²	2003年 8月1日 ~8月29日	
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
増山裏亀山 遺跡	散布地	室町時代 近世	堅穴状遺構、土坑、溝、 ピット	上師器 越中瀬戸 近世陶磁器	城下町の範囲外で建物に 関する遺構を検出した。	

EXCAVATION REPORT OF THE MASUYAMA-URAKAMEYAMA SITE

Copyright © Tonami Prefectural Board of Education
7-3 Sakaemati Tonami-City Toyama 939-1398,Japan

No parts of this publication may be reproduced or copied by any means
without prior permission of the copyright owner.

—林道増山城跡線掘削工事に伴う緊急発掘調査報告書—

増山裏亀山遺跡発掘調査報告

2004年8月31日発行

発行 研波市教育委員会

〒939-1398 富山県砺波市柴町7番3号
TEL (0763) 33-1111 FAX (0763) 33-6828

印刷 有限会社明和印刷

〒939-1507 富山県東礪波郡滑川町二日町2196番地
TEL (0763) 22-4881 FAX (0763) 22-4880

Printed in Japan

